

# 「聖書から分かる神の愛」

| ヨハネ 4章 9-10節

『神の愛われらに顯れたり。神はその生み給へる獨子を世に遣し、我等をして彼によりて生命を得しめ給ふに因る。愛といふは、我ら神を愛せしにあらず、神われらを愛し、その子を遣して我らの罪のために宥の供物となし給ひし是なり。』

## ■ 私たちに神の愛が明らかに示されたに

I ヨハネ 4:9にある『神の愛われらに顯われたり』の『顯われたり』は単に現れた（アピアー）のではなく明らかに示された（ファネロー）という意味であり、これは神の愛の根拠を示しています。それは御子を世に遣わして私たちに肉体の生命（ブシュケー）ではなく靈的な永遠の生命（ゾエー）を得させるためでした。神様の愛を知る前の私たちは『咎と罪とによりて死にたる者（エペ 2:1）』でしたが、神様は私たちに生命を得させようとされました。そのために神様はどうされたのでしょうか。

それは「独り子を世に遣わしてなだめの供え物とされた」のです。なだめる（ヒラスモス）とは怒りを静めるという意味ですが、これは幕屋の至聖所内に置かれた契約の箱のことを思われます。契約の箱の中にはモーセの十戒が書かれた碑があり、大祭司はこの場所を罪の贖いのために山羊や雄牛の血を契約の箱の蓋にかける贖罪所（ヒラステイリオス）としていました。この当時、契約の箱の中にあつた碑に記された内容は私たちの罪を訴えてくるもので、その箱の蓋の上に流された血によって代価が払われていました。ここは真実の供え物として受肉される御子イエス様の出現を約束している箇所です。このようにやがて現れてくださる贖い主を待ち望むヘブル人のためのものでした。旧約にある掟と預言の書のなかで、みことばは『ロゴスの受肉（イエスの降誕）』をうたっており、これこそが、『顯われたり』なのです。

## ■ イエス様の出現を信仰によって知らされた人々と悟れなかった人たち

信仰の父といわれるアブラハムは年寄りになるまで子が与えられませんでした。その当時子どもが生まれないという事はとても不名誉な事で、イサクの誕生は大きな喜びでした。しかしある日、アブラハムは神様に息子イサクを全焼のいけにえとして捧げるよう言われます。山に登る途中、イサクに全焼のいけにえはどこにあるのかと聞かれたときのアブラハムの思いはいかほどのものだったでしょう。そこから私たちは父なる神がイエス様を私たちの罪のために捧げた時の思いをうかがい知ることができます。しかし、そのような状況におかれてもアブラハムはエホバエレ（アドナイイルエ、神様が必ず備えてくださる）と信じていました。イエス様の生まれる 2000 年も前に生きた人がこの時代の信仰を持っていたのです。また、700 年前には預言者イザヤがでてきます。彼もまた、まだ見ぬイエス様についてイザヤ書 53 章 1-3 節にあるとおり、誰からも受け入れられない見たところみすばらしいと思えるナザレ人イエスの出現を聖霊によって知らされていました。ヨハネ 1:14には言葉は肉体となって我らのうちに宿ったとあります。神様は私たちが生きるこの罪に満ちる世界の上に幕屋を張り、たった独りの大事な御子を遣わしてくださったのです。しかし、イエス様に選ばれた 12 弟子はイエス様の本当の姿を見出すことはできませんでした。ペテロでさえも十字架の前に 3 度イエス様を否み、誰一人イエス様のもとへは残りませんでした。そしてイエス様はひとり十字架に向かわれます。私たちに目は開かれていないと真実が分かりません。そのような中、パテスマのヨハネは目が開かれており、イエス様を本当のなだめの供え物、これぞ世の罪を

負う（背負うまたは除く）神の小羊とすることができました。当時のパリサイ人や学者、祭司たちはどうだったのでしょうか。彼らに対しイエス様は「汝らは聖書に永遠の命ありと思ひ我の事を示す。されど聖書は我を証する。」と語りました。イエス様の時代には旧約聖書しかなく、39 巻に示されたみことばを当時の学者、祭司、ユダヤ人たちは熱心に調べていました。しかしイザヤ書 53 章にある姿のイエス様をみても彼らには一介のユダヤ人にしか見えませんでした。しかもイエス様に対し、「彼は自分のことを神の子と言い、安息日も守らない」とし、彼は掟に反していると訴え出たのです。

## ■ 全世界に届けられたイエス様の十字架の愛

当時のユダヤ人に対する刑は石打ちが主で、十字架刑はありませんでした。しかし、イエス様は『モーセ荒野にて蛇を挙げしごとく、人の子もまた必ず挙げらるべし。（ヨハネ 3:14）』とあるように十字架刑を受けられたのです。これはローマの奴隷や囚人に対して行う最も忌まわしい刑でした。また、十字架刑を受けるイエス様の上には捨て札が掲げられました。そこにはヘブル語、ギリシャ語、ラテン語で「ナザレの王」と表記されました。当時の社会をいかなれば、ヘブル語はヘブル民族による世界に対し、ギリシャ語は文化や芸術の世界に対し、ラテン語は政治的支配をしていたローマに対して現されたものであり、つまりはこの呪いの刑は全世界、全人類に対して宣告されたものだったのです。

## ■ 私たちに与えられたみことばによる恵み

ガラ 4:4-5 と I コリ 15:56 には、私たちが神様の掟の元にある者つまり呪われている者で、罪を犯した者への裁きは掟に照らして裁かれると示されています。この掟が執行されるもとにイエス様は来られました。神様の権威を持って生まれたのに裁くどころか裁かれる立場にまで下って来られたのです。これは大なる恵みです。そして、このことを通して神様は私たちを実子と同等の権利を持つ養子としてくださいました。私たちはそのような恵みのうちにあります。聖霊は今、私たちの霊のうちに実現してくださっています。私たちにアダムとエバから始まった私たちのうちにある怒る性質や、みことばに従わず神の掟に反逆しようとする心（原罪）があります。私たちは弱いところがあり、つまずきやすく、また不敬虔なところもあります。ヘブル 10:16-17 には、私たちがなお罪人の中にいたときも神様は私たちを愛してください、不敬虔であったにもかかわらずその代価を払ってくださったことが示されています。こうして私たちを責めるものは何もなくなったのです。イエス様は十字架の上で息を引き取られる瞬間に「完了した」と言われました。ここで裁きは終わり、私たちを責めるものは何もないこと、贖いの御業が完成したことを明らかにされました。このことが御父によってなされたのです。イエス様は山羊や牛の血ではなく、自らの血によって永久の贖いを成し遂げられました。私たちは死に至るまで、みことばに根付くことに忠実でありたいものです。信ずる者は裁かれず、信ぜぬ者はすでに裁かれていたりあります。これは現在完了形で、すでに裁かれていることを示しています。私たちに神様のもとに至るいのちの道があります。これからもその恵みをみことばを通して学んでいきましょう。『神は言われます。「わたしは、恵みの時にあなたに答え、救いの日にあなたを助けた。」確かに、今は恵みの時、今は救いの日です。（II コリ 6:2）』

(要約者:平澤 瞳)

(11月5日)